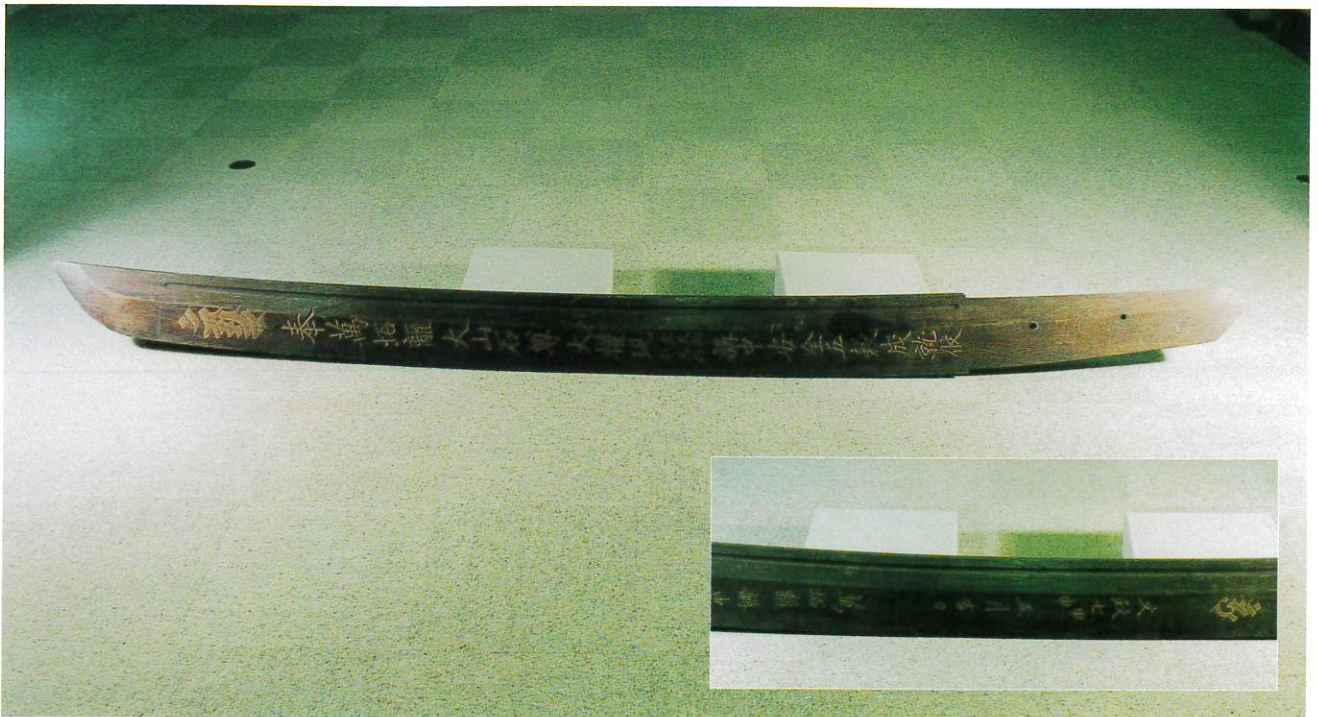


# しいのき



## 万 垢 離

名誉館長 三 隅 治 雄

明治の末まで、毎年5月下旬に、妙正寺川支流中ほどにあった垢離取不動で万垢離が行なわれていたそうです。ほんらい災厄の多い夏に「万の垢を解き離つ」夏越の祓え行事ですが、旧江古田村では、五つに分けた組の月番が、組内の戸数分の五色の幣束を作り梵天にさして祭場に立て、人々が川に入って身を清めます。特異なのは、四メートル近い大木太刀を川で洗い清める儀礼です。写真は、文政七年五月の年号が刻まれた太刀で、相撲の大山石尊不動を信仰する万垢離講中が五穀豊穰の祈願に献じたものと見られます。大山大権現は降雨に靈験があるといわれ、水が命の農民から絶大な信仰が寄せられました。中野区内にも、上高田の桜ヶ池不動、白鷺の垢離取不動、弥生町の大山不動があり、どこでも講中が雨乞いにも、豊穰祈願にも、大山参りの出立にも水垢離を取ったそうですが、その水も信仰も、都市化とともに昔語りになったのがさびしい限りです。

# 文化財よもやま話

## モノ、おもう

人に心があるように、モノにもココロがある。数多くの物品を相手にしていると、そんな想いにふととらわれることがあります。展示・研究活動の貴重な材料として資料館に収められている資料は、人々の歴史の中に生き、また人々に歴史を示してくれるものばかりです。それらを作った人、使っていた人、持っていた人、伝えた人。実に多くの人の手を経て、今日まで存在してきました。品は、寄贈され収蔵される経緯での出会いをどう受け止めているのだろう。そう収蔵資料のひとつひとつに思いを馳せてみると、今までとはまた異なる視点が生まれ、様々なことに気づかされます。

例えば、先日一点の瀬戸焼が寄贈されました。瀬戸焼は言わずと知れた日本を代表する陶器で、愛知県瀬戸市を中心に窯が分布しています。聞くところによると、当地に住む親戚の敷地から出土したそうで、試行錯誤の末に完成までこぎつけた初期の作品と伝えられたそうです。まだ粗野でありつつも作り手の辿ってきた心境や苦勞が滲み出ていて、以後芸術品として洗練されていく瀬戸焼の原点として未知なる可能性を感じます。

生活の基本に挙げられる衣食住で、器は食分野に相当します。原始時代の遺跡からも遺物が発掘されるほどその歴史は古く、石や木、土から金属・プラスチックと変遷をたどりつつも、その機能はさほど大きく変わることはありません。つまり、現在使用する道具の原型は早くから完成しその基本は保たれながらも、時代や地域、個性の影響を受け、各々の感性によって磨かれてきたのです。その切磋琢磨の過程を知る一助として、資料はわたしたちの目の前に現れ、それぞれで関わった人々の気持ちを代弁しているかのようです。資料との出会いは、同時に人との巡り会いである、と改めて気づかされました。モノを通して見えるもの、その形に映り浮き上がる心。手にした人の心は、いつも、いかなるものであったのでしょうか。

品に招かれ惹きつけられる機会に恵まれたなら、それぞれの人生を見てきた品々が背景として抱える世界に触れる贅沢を味わってみて下さい。その品を通して知る想いもまた一期一会、時空を超えた交流が醍醐味となり、心に響くことでしょう。

# 大地に眠る歴史

## 昔の人は遺跡をどう見たか(10)

現在では縄文時代といえば、数千年前の狩猟採集の時代で、稲作が日本にひろがるより前であることは常識となっています。しかし、昭和の初め頃はまだ、いつごろまでが縄文時代なのか確定していませんでした。

昭和10年代、のちにわが国の縄文土器の編年を完成させた東京大学の山内清男(1902~70)は、縄文時代の終りは一斉に迎えるという結論にたどりついていました。その結果を昭和11年(1936)に創刊された『ミネルヴァ』という学術雑誌に論文として掲載しました。

そこに異論をはさんだのが東北大学の喜田貞吉(1871~1939)です。喜田は同じ『ミネルヴァ』誌上に論文を載せて批判しました。

内容は縄文遺跡に中国宋時代(960~1279)の銭貨が出土したことから、縄文時代の終りは、少なくともその例のある東北地方では鎌倉時代まで新しくなるというものでした。山内は反論を『ミネルヴァ』誌上に寄せ、論争が開始されました。これが有名な『ミネルヴァ論争』です。軍配は、東北・関東・中部・近畿の土器がそれぞれが一緒に出土する例を挙げて論証した山内に上がりました。

それでは喜田の挙げた縄文遺跡に中国宋時代の銭貨があったことは、一体どのように解釈されるのでしょうか。

遺跡を調査すると大抵の場合は、様々な時代の遺物が発見されます。そして、昔の開墾などによって、地中の遺物が移動して、縄文土器と新しい時代の遺物が隣り合わせで発見されるようなことは普通にあります。今ではそれらを識別できるように調査者は訓練されていますが、昭和10年代当時は、古い時代の荒らされていない土層を見る目が養われていなかったのです。

遺跡の調査の機会が少なく、精度も悪い時代のことですので、この判断もやむを得ないということでしょう。(つづく)



喜田貞吉  
『国史大辞典』より



# れきみんの「体験活動」で大活躍

## 江古田小学校児童の皆さん

秋たけなわの10月23日、30日、11月13日の3日間、地元の江古田小学校5年2組の女子児童4名が「体験活動」として当館にお手伝いに来てくれました。

これは、江古田小学校が、昨年度から新しい教育活動として取り組んでいる「総合的な学習の時間」の中に、自ら学び自ら考えて課題を解決しようとする「生きる力」の育成を図るため、「地域の方々との関わりを通して自分たちの生き方について考えてみたい」ということから、何かできることを体験させたいと「体験活動」を計画したものです。

そして、多くの「体験活動」の中から女子児童4名が当館を希望しており、受け入れについての要請を先生から受けて行われました。



メンバーは、橋本喜美子さん、金井美穂さん、藤野恵美里さん、水流あかねさんの元気な4名で、活動内容を記入した「EGOTAプロジェクト計画カード」をもって事前に挨拶に見えました。

当館には資料館に隣接して、樹齢600年を超える椎ノ木と江戸時代の天保年間に建てられた貴重な茶室のある広い庭園があります。

この庭園は、定期的に清掃していますが毎日ではないこと、庭園のフェンス工事時に出た石が庭園の趣を損ねていたこともあり、清掃と石の除去をお願いすることとしました。

「体験活動」は、午前11時から正午までの1時間でした。当日は、事務室に来て元気よく挨拶の後、作業の内容を聴いて早速腕章をつけて軍手と

バケツを持って庭園に出ました。

折しも庭園は、椎の実が一面に落ちており、清掃してもすぐ椎の実が落ちてくる状況でした。

4名は一生懸命石拾いや清掃をしてくれ、おかげで、庭園は大変きれいになりました。

そして掃き集めた沢山の椎の実を袋に入れ、クラスのお友達にお土産として持って帰り大人気になったとのことでした。



「体験活動」の最終日は、館内で「酉の市」の展示の手伝いをしてもらいました。

展示場は玄関から入った1階正面のロビーです。展示に使用する熊手は地下1階の収蔵庫にありますので、ここから搬出しなければなりません。収蔵庫には、通常一般の方は入れませんが、臨時の学芸員として4名にも職員と一緒に収蔵庫に入ってもらうことにしました。

収蔵庫に入り、沢山の収蔵品を見た4名は初めてということもあり、大変な喜びようで強く印象に残ったようでした。そして、率先して熊手を搬出し、立派に「酉の市」の展示を完成させてくれました。

4名の皆さん本当にありがとうございました。

このたびは、当館で「体験活動」を実践していただきました。「庭園の清掃」や「酉の市」の展示は貴重な体験になったのではないかと思います。

これからも、当館での体験の場をご希望される方があれば、出来得る限り対応させていただきたいと思っております。お申し出をお待ちします。



## 2003年度下半期 学校週五日制対応事業報告

前号でお知らせしましたように、小館では昨年度「れきみんへ行こう！」をキャッチコピーにして、青少年（特に小中学生）を対象とした事業を実施してきました。下半期に行ったのは次の3講座です。

### 【歴史体験講座】ドキドキの土器

「学校週五日制対応事業」第四弾として、10月25日(土)に「ドキドキの土器」を開催しました。

縄文人の気分になって世界でたった一つの縄文風土器を作る本講座には15組39名が参加されました。講師の古川幸子先生から縄文時代の説明を受けた後、さっそく土器作りにはいります。陶芸と



◀ 講話中の古川先生

いってイメージしやすいものとは違って縄文土器はろくろを使わず、手づくね（粘土の塊から直接形を作る）や輪積み（粘土をひも状にして積重ねていく）で作ります。ところが実際にやってみますとこれがなかなか難しいもの。手づくねは大きな物や深い物には向きませんし、輪積みは粘土ひもの接着が弱いと壊れてしまいますので、先生のご指導もそのあたりに集中しました。おおまかな形作りが終わったら今度は模様づけと仕上げです。ヘラや貝ガラなどを使い、想像力と創造力を働かせてデザインしていきます。これで形成は完了。一ヶ月ほどじっくり乾かしてから焼成しました。



◀ みなさんとても真剣

結果は下の通り。作成時にしっかりと叩いて粘土から空気を抜いたのと時間をかけて乾燥させたことが功を奏し、割れたり破裂したりしたものは一点もなく、全作品が無事に焼上りました。指先に乗るようなものからズッシリと重いものまで様々ですが、器形は鉢型と盤型に人気が集ったようです。模様は貝ガラによるものが大多数で、写真のように二枚貝・トコブシ・巻貝の縁を使ったものやヘラで描いたもの、変ったところではシャボン玉吹き・ドライバーなどを押しつけたものもありましたが、なぜか縄文土器の王道である縄目模様はほとんどみられません。

自分の指先で形を作り、創意工夫して模様をつけた作品が“焼きもの”として完成する…何かをつくる難しさと喜びを体験した講座でした。



▲ 完成した全作品。なお、製作の様子がシティテレビ中野で紹介されました。



## 【伝統工芸体験講座 その2】チャレンジしよう! 東京手描友禅

伝統の技を体験する講座の第2弾『チャレンジしよう東京手描友禅』は、東京都伝統工芸士の高橋貞雄さんを講師に迎え、11月29日に行いました。



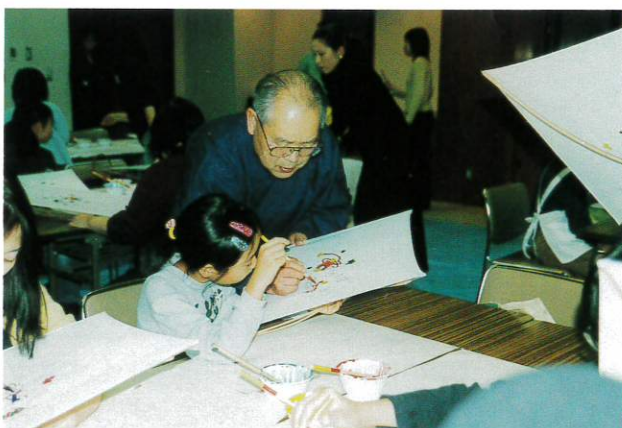
手描友禅ができるまでには、たくさんの工程があり、そのほとんどの工程を一人でこなしています。今回の講座は、図案から糸目糊置きという工程までを前もって準備していただき、「友禅挿し」という工程を体験しました。図柄は、古典的な打出の小槌、勾玉などをあしらった、宝づくしのデザインです。構図を決めて、水で簡単に洗い落とせる、ツククサの搾り汁で下絵をかき、手描友禅専用の糊を下絵の輪郭に沿って置きます。これは、染料がにじんだり、混ざり合うのを防ぐもので、この糊も水で洗い落とせるものです。着物や帯などに用いられる手描友禅は絹ですが、子供も体験できるように扱いやすい木綿の生地と、専用の染料を使用しました。

参加者は、小学2年生から6年生まで14人とその保護者でした。まず、東京手描友禅の歴史など



の説明を聞き、基本的な手描友禅の製作工程をビデオで見ました。その後、手描友禅の最も重要な図柄に色を付ける「友禅挿し」の体験をしました。染料を筆に含ませ、自由に色を付けていきます。ドライヤーで染料を乾かしながら、少しずつ塗ります。隣り合った所は、後回しにし、糊で画された図柄の内側にていねいに色を付けます。慎重にやってもなかなかむずかしく、はみ出してしまったりします。そんなときには、先生が、アレンジしてくれました。最後に名前を入れて、体験修了です。仕上げには、水洗い、乾燥という工程がありますが、これは、家に持ち帰ってやってもらうことにしました。

伝統工芸は、人々の生活の中から生まれ、長い



時間をかけて受け継がれてきたものです。それらすべてが、人の手によって作られたもので、私たちは、その美しさや技術に感動させられます。これらの伝統を引き継いでいくためにも身近に接する機会を作りたいと思います。

## 【伝統遊び体験講座】風とあそぼう

青少年対象事業の最終回は、2月7日(土)、14日(土)に『風とあそぼう』を行いました。

竹や紙で凧や紙飛行機などをつくり、手作りの遊びを体験しました。



# 冬休み 特別事業

学校の休業日に合わせ、夏休みだけでなく冬休みにも特別事業を行いました。本年度は初雪の降った翌日・12月27日(土)午後の【宝づくしのハンカチ作り】と【こま回し体験】がメインイベントです。

## 【宝づくしのハンカチ作り】



資料館では、季節感を味わい、年中行事を身近に感じてもらえるよう、雛人形を飾ったり、鯉幟を立てたり、七夕飾りをしたりしています。冬休みといえば、なんといってもお正月です。そこで、おめでたいお正月にちなんで、打出の小槌や勾玉

## 【こま回し体験】

ハンカチ作りが一段落して染料を乾かしている間、伝統遊び体験として「こま回し」にチャレンジです。

まず最初に担当者がひもの巻き方・こまの投げ方などを説明し、それから実際に自分で回してもらいました。



とはいえ見るのとやるのとでは大違い。こまにひもを巻く段階から何度も失敗し、ようやくきちんと巻けても、腕の振りが逆だったり手許へ引かず前へ投げてしまって倒れたり飛んでいったり、回っ

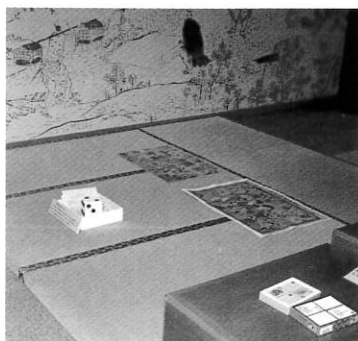


たのに勢いがつきすぎて台から落ちたり…

単純な遊びだからこそ、ちょっとしたコツが重要になることを実感してもらえたようです。

上記イベントの他、冬休み特別事業としてスゴロク・カルタで自由に遊べるコーナーを設け、また通常は第2・4土曜日に実施している“れきみんスーパークイズラリー”を毎日行いました。

館蔵資料より1912(明治45=大正元)年と1923(大正12)年のスゴロクを複製、「いろはかるた」や「おトギかるた」もお楽しみいただきました。



クイズラリーは問題がA～Eの5種類で、A～Cを全問正解すれば「れきみんマスター」に、DとEも完璧なら「れきみんドクター」に認定となります。

# 古文書つづり

## あてにならない 自書署名

前号の本コーナーで武家文書の受贈を取上げたのですが、一部に厳密でない表現がありました。お気づきになりましたか？ どなたからもご指摘されませんでしたので自ら暴露しましょう。

問題の箇所は最後の解説部分、

「判物：判(=花押。直筆サイン)のある文書」

という一行。さて、どこが不適切な表現？

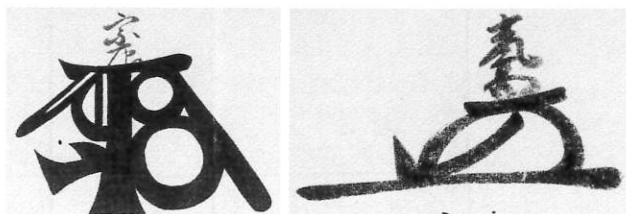
答は『直筆』の部分です。文字数の関係上このような表現をしましたが、実は花押のハンコというものが存在します。本来花押は署名から発展した本人証明や偽造防止のためのものですので、文書発信者による直筆が大原則でした。しかしながら文書行政が発展し規格化するに伴い、定式的・儀礼的なものを一度に大量に発給する場面が多くなります。こうなると花押のもつ本人証明や偽造防止の役割は後退し、明らかに筆書きでないものでも代用できるようになったのです。



◀花押のハンコ  
石井良助 著 『印判の歴史』明石書店 1991 より  
捺せば輪郭線が残るタイプ

ハンコ型花押の早いものは鎌倉時代ですが、近世にはいると事例が多くなります。これには現在の印鑑のように形そのもののものと、輪郭だけ形取り、その中を筆で塗り潰すものがありました。とはいえ自筆の原則はわずかに残り、本人が自分で捺すか、輪郭式の場合なら最後の一筆くらいは本人が塗るものとされていたそうです。

写真は新規寄贈文書からハンコと自筆の花押。見比べれば違いがはっきりしていますね。



▲左：印による花押 右：自書の花押 (縮尺不同)

## 中野往来

### 区民の憩いの場 哲学堂

新井薬師前駅から北へ歩いて15分程のところ区立哲学堂公園があります。この公園は、哲学館(現東洋大学)の設立者で哲学者の井上円了が、当時まだなじみが薄かった「哲学」を人々に広めようと、精神修養の道場として、明治37年に哲学堂を建立したのが始まりです。

入口を入るとすぐ左に、不思議な門があります。“哲理門”といって、左右には仁王様でなく天狗と幽霊の像が納められています。これは、物質界と精神界に存在する不可思議を象徴したものです。門をくぐると、孔子・釈迦・ソクラテス・カント4人の哲学者を祀った“四聖堂”、哲学は宇宙の真理を研究する学問であるという考えから名付けた講義室“宇宙館”などの建物があります。哲学的な意味合いを持たせた建物や石碑をいたるところに配置し、木や川、空間なども含めて、公園を歩きながら哲学を目で見えて考えられるように独自の工夫が凝らされています。

哲学堂は、歴史的にも物語の多い場所です。まず、この辺り一帯は、大田道灌と豊島氏が戦った江古田原沼袋合戦の舞台でした。そして、この地は和田山と呼ばれ、和田義盛の館があったと伝えられています。明治期には、公家の五辻安仲の別邸があり、東側の土地は、村民が借りて、明治10年頃からお茶の栽培をし、また別邸の一部を借り受けて学校としました。平成4年には、野球場の地下に弓道場を建設するにあたり、遺跡の発掘調査を行いました。その結果、明治時代以前に作られたと思われる幅約3～6mの道路が、長さ20mにわたって発見されました。明治時代から公園として整備され、大きく掘り返されていない妙正寺川に至る斜面地は、縄文時代の遺跡が広がっていて、公園の地中にも人々の暮らした歴史がたくさん残されていると思われます。

平成12年には、梅林も整備され、緑の木々に加え、2月は梅、春は桜やツツジ、秋は紅葉と四季を通じて目を楽しませてくれます。このように哲学堂公園は、歩きながら哲学を学ぶだけでなく、スポーツに汗を流したり、緑や花を散策したり、まさにみんなの憩いの場となっています。



# 事業報告

## 各種事業経過

2003年10月～2004年3月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「小さな視点・大きな視点」—明治～昭和のポスター・絵はがき—	10/1～11/30
	「おひなさま展」—江戸時代から昭和までのおひなさまを展示—	2/7～3/7
	「秋季所蔵名品展—旧家の佳品」—江古田村名主の山崎家資料展示—	10/4～12/27
	「冬季所蔵名品展—浮世絵の競演」—歌川派の浮世絵を展示—	1/10～3/31
文化財公開	山崎家茶室・書院公開	11/1～30
歴史体験講座	「土器をつくろう」 講師：古川幸子氏（陶芸家）	10/25
	「風とあそぼう」—昔の遊び体験— 講師：小暮欣作氏（元武蔵台・江古田小校長）	2/7・14
伝統工芸体験講座	「チャレンジしよう東京手描友禅」 講師：高橋貞雄氏（都知事指定伝統工芸士）	11/29
冬休み特別事業	「宝づくしのハンカチ作り・こま回し体験」 講師：館員	12/27
文化財調査	「江古田・沼袋」民俗調査第4次報告	3月刊行
埋蔵文化財 対 応	南台五丁目37番民有地試掘調査	10/14～16
	江古田三丁目14民有地本調査（江古田遺跡第2次調査）	11/18～3/31
	南台二丁目40番民有地立会調査	12/5
	白鷺一丁目16番民有地立会調査	12/10
	白鷺一丁目16番民有地立会調査	12/11
	南台一丁目5番民有地立会調査	1/8
	江古田一丁目24番民有地立会調査	1/20
	弥生町三丁目35番民有地試掘調査	2/26
若宮一丁目10番民有地試掘調査	3/3	
文化財啓蒙事業	「江古田遺跡見学会」 講師：館員ほか	3/6・7
そ の 他	小学校3・4学年総合学習見学：20校（区内18校・区外2校）	10月～3月

## 寄贈資料一覧

2003.5月～11月  
敬称略 受入順

資料名	点数	氏 名
ひな人形	一式	阿部伸一
ひな人形（大正2年）	一式	川島彩子
郷土玩具（昭20～平成）	一式	堀口きみ
掛け軸（龍頭観音像）	一幅	土田はる
ひな人形	一式	片桐梢・直子
舟箆筒・掛け軸・重箱	3	山本美智子
あんか・電気あんま	3	安達隆司
古文書・刀剣・屏風など	一式	大河原昌夫
生計調査・家計メモなど	2	中川良平
日本人形「小鍛冶」	1	根岸レイ子
鍬	1	深野辰三
買い出し用リュック	1	笹川克巳
万垢離（まんごり）小太刀	1	深野辰三
長持	1	杉田辰也
万燈	1	江古田獅子舞保存会
中野区庁舎落成記念記念鉄瓶ほか	一式	和田鷹男
日本人形	12	堀野隆之介
べっこう髪飾り・古銭など	一式	柳町翁義

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

## 入館状況

2003年9月～2004年2月（延べ143日間）（人）

一 般	団 体	学校教育	合 計
14,114	172	1,119	15,405

## NEWS 新刊案内

『中野区第4次民俗調査報告 江古田・沼袋』  
区内北東部の生活変遷・伝承の調査報告です。

発行年月日 2004年4月1日

編集・発行  山崎記念  
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03 (3319) 9221 FAX 03 (3319) 9119

(印刷物登録番号 15教生-5)